

文献紹介

中村太一著『日本古代国家と計画道路』

吉川弘文館 1996年7月

A5判 269ページ 6489円

木下良編『古代を考える 古代道路』

吉川弘文館 1996年4月

四六判 315ページ 2575円

かつて、故藤岡謙二郎氏を中心として、昭和47年(1972)に歴史地理学の立場から全国の古代駅路の調査が実施され、その成果は『古代日本の交通路』I~IV、大明堂、1978~1989、にまとめられ、長らく学会共有の財産とされてきた。昨年刊行された中村・木下両氏の編著書は、その後の四半世紀に及ぶ研究成果を示し、日本古代の計画道路(官道)の研究水準を一気に高めるものと判断される。

まず、中村氏の『日本古代国家と計画道路』は、氏が木下氏の指導を受けられて後の10年間の研究成果をまとめ、平成7年度に国学院大学に提出した学位論文を刊行したものである。その目次は以下のとおりである。

序章 古代計画道路研究の課題

第一章 日本古代計画道路の特質

第二章 日本古代計画道路の形成要因

第三章 計画道路体系の展開過程

第四章 律令国家の領域編成と計画道路

第五章 国府立地の交通条件

第六章 大和国における計画道路体系の形成過程

第七章 東国駅路網の変遷過程

第八章 『出雲国風土記』の空間認識と道路

第九章 山陽道美作支路の復原

第十章 備前国における古代山陽道駅路の再検討

付論 水上交通利用の構造と地域的特質

第五章から付論に至る7編の論文は、すでに「歴史地理学」や「国史学」などにおいて発表されており、第四章までの5編が新稿である。いずれの章も、中村氏の若々しい創意と卓見に充ちており、木下氏の暖かい眼差しのもとで研究を進められてきた過程を十二分に窺うことができる。

中村氏の研究成果の一端は、以下の様にまとめられよう。

第1に、研究のスタンスとして、歴史地理学的な検討・復原はもとより、古代の文献史料も十分に読み込み、考古学的な成果も活用するなど、偏

りのない学際的な研究が進められている。この点は、氏の研究スタンスの広さと共に、人脈と情報網の広さを示すものである。

第2に、かつての古代道路研究が日本国内の直線古道の確認とその復原に主力をおいてきたのに対して、第一章でローマ道や隋唐代の計画道路と対比しつつその特質を探るなど、世界史的な視野で検討されている。ただし、ローマ道に関する豊富な情報に対して、当該国での研究の遅れから、日本の古代道路の直接的な源流になったと想定される隋唐代の計画道路の情報が少なく、朝鮮半島諸国への言及が無いのは、何とも惜まれる。

第3に、かつての研究は、律令駅制の盛期を示す奈良時代のものではなく、平安中期の「延喜式」に載せられた変質後の駅の比定とそれらを結ぶ直線的な駅路の復原に重点をおいてきた。これに対して、第二章において、7世紀初頭の推古朝から律令駅制が崩壊する10世紀までを一貫して検討し、古代計画道路を指標として、形成期(I期)・前期(II期~IV期)・後期(V期~VI期)に分けて、各期における古代道路の位置付けがなされている。本章によって、古代計画道路の形成から変質・崩壊に至る過程が、さらに明瞭に提示された。それに対応して、東国(第七章)や大和国(第六章)などを例として、各期ごとの詳細な復原図が示されており、すこぶる貴重である。また、「駅路型計画道路(幅員約12m)」と「伝路型計画道路(幅員約6m)」の存在も文中に提起されており、今後、各地で伝路の発見と復原が進展することを期待したい。

第4に、大和国(第六章)を代表例とする近畿地方のみならず、東国(第七章)や出雲国(第八章)、さらには、山陽道美作支路(第九章)・備前国(第十章)など、関東以西を中心とする各地の実例が検証されている。これは各地の地域差の実態を示すと共に、「律令法その他が示すような制度の面からではなく、運用面・実態面から解いていかなければならないと考えられる。(257P)」と明記された氏の研究態度を実践したものである。

第5に、付論において、東国における古代の水上交通の全貌の一端をはじめて明らかにしたことである。その重要性にもかかわらず、従来の歴史地理学の研究が陸上交通に大きく偏っていたこと

は否めない。他の地域においても、陸上交通と水上交通の両者を研究の射程内に含み込んだ、懐の深い検討・復原が進められることを期待したい。

以上の諸点は、氏の著書に含まれる多くの成果の一端を述べたものに過ぎず、他にも多くの創意と卓見に充ちている。無論、引用された個々の史料や遺構などの解釈に関しては、他の解釈の可能性もお残されているが、さらに史料をより深く読み込み、国内はもとより、東アジア各地でより詳細に古代道路の検討・復原が進められることを切に期待したい。

他方、木下氏編の『古代を考える 古代道路』は、『古代日本の交通路』を全面的に改訂したもので、四半世紀の成果を踏まえて、地域ごとの研究をまとめたものである。その分担者は以下の通りである。

- 一 古代道路研究の近年の成果 (木下 良)
- 二 畿内—古代的な地域計画との関係を主にして— (千田 稔)
- 三 東海道—海・川を渡って— (木下 良)
- 四 東山道—山坂を越えて— (木本雅康)
- 五 北陸道—その計画性および水運との結びつき (金坂清則)
- 六 山陰道—風土記にみる古代道路— (中村太一)
- 七 山陽道—瓦葺きと白壁朱塗りの駅館— (高橋美久二)
- 八 南海道—直線道と海路・山道— (金田章裕)
- 九 西海道—西の辺要地の道路の整備— (日野尚志)
- 十 古代道路の遺構 (木下 良)

まず、木下氏の論文は、四半世紀にわたって古代道路の研究をリードしてこられた氏が、研究の現状と課題をコンパクトにまとめたものである。内容は多岐にわたるが、氏の積年の研究成果の一端を披瀝されている。特に、伝路に多くのページを割いていることは今後の伝路研究の重要性を示すものであり、古代道路の軍用的性格を特に論じていることも、北陸道ははじめ各地で確認されつつある複線的な古代道路研究の重要性を示すものである。

その一方で、奈良盆地を南北に平行して通る三本の直線道の建設時期を斉明朝に想定されるなど、幾つかの重要な点において上記の中村氏の説とは異なる解釈も示されている。さらに研究が進

展し、統一的な見解が提示される日を待ちたい。

千田氏の論文は、古代道路研究の先進地である畿内諸地域の実例を、簡潔にして要を得た概説としてまとめている。

木本氏の論文は、東山道諸国の駅と駅路を検討・復原したものである。特に、下野国を事例として伝路が詳細に検討・復原されており、118 P に載せられた「下野国の駅路と伝路」と131 P の「那須郡付近の駅路・伝路概念図」などは、伝路の具体的な復原が少ないだけに、貴重な成果である。

金坂氏の論文は、北陸道における冬期の陸上交通の途絶を前提とした、海上交通・河川交通との密接不可分な関連を論じつつ、その実態を明らかにしている。さらには、越前国を事例として、複線的な古代道路を検出し、国府・郡家はもとより、軍団さらには郷(郷倉)、有力寺社(式内社など)を含み込んだ、まさに越前国の地域整備計画を解明している。151 P に載せられた福井平野の復原図は圧巻である。

高橋氏の論文は、都から太宰府に至る最も重要な山陽道の駅路と駅家を検討・復原している。特に、氏は駅家に葺かれた国府系瓦にいち早く着目し、その出土地を追うことで山陽道の駅家の比定と駅路の復原に成功している。また、駅家の発掘事例が少ないだけに、播磨国の布勢駅家(龍野市の小犬丸遺跡)と、同国の野磨駅家(落地遺跡)の発掘図は貴重である。

金田氏の論文は、南海道の駅路の変遷を述べるとともに、讃岐平野を事例として、讃岐国の地域整備計画を論じている。讃岐国は他の諸国に比較して文献史料や荘園絵図などの関連史料が豊富である。これらを総合的に検討しつつ、南海道の測設と直線郡界の設定を前提・基準とする、条里プラン設定の時期的な前後関係とその実例が明らかにされている。

日野氏の論文は、西海道諸国の駅路の概略を述べつつ、北は博多湾岸に位置した筑紫館から、太宰府を経て、南は筑紫平野に至る論考である。西海道の要地の地域整備計画を示す274～275 P の復原図と解説は、これもまた圧巻である。

直線的な古代道路の研究が、条里制や国府などととも、古代の歴史地理学的な地域研究に欠かせないことは、もはや自明である。隋唐は無論のこと、朝鮮半島諸国も視野に入れて、古代道路に関する研究が、東アジア的視野でさらに進展することを心から期待したい。(伊藤寿和)